

# 平成6年度赤潮貝毒監視事業（貝毒調査：抄録）

酒井 基介・湯浅 明彦・牧野 賢治

## 目 的

本事業は、特定有毒プランクトンに起因する二枚貝類の毒化実態を把握し、貝類の食品としての安全性を確保するとともに、漁業等への被害の軽減と未然防止を図ることを目的として、昭和55年度から継続実施中の事業である。

平成6年度における鳴門市「内の海」、小松島市「小松島湾」、阿南市「橘湾・椿泊湾」での毒化原因プランクトンの出現動向と環境および麻痺性・下痢性貝毒によるアサリの毒化実態について取りまとめたので報告する。なお、詳細については、「平成6年度赤潮貝毒監視事業報告書（貝毒調査）」を参照されたい。

### 1. 麻痺性貝毒原因プランクトン

*Alexandrium tamarense* : 4月および2~3月に出現し、最高出現数 (cells/ℓ) は、内の海で1,750、小松島湾で240、橘湾で8,650、椿泊湾では15,200であった。全水域における出現時期の水温は7.80~18.00、塩分は18.47~34.51であった。

*A. catenella* : 5~7月に出現し、最高出現数 (cells/ℓ) は、内の海で7,400、小松島湾で26,250、橘湾で55,000、椿泊湾で78,700であった。全水域における出現時期の水温は17.50~28.80、塩分は15.47~33.07であった。

### 2. 下痢性貝毒原因プランクトン

*Dinophysis fortii* : 4~7月および3月に出現し、最高出現数 (cells/ℓ) は、内の海で460、小松島湾で310、橘湾で140、椿泊湾で70であった。全水域における出現時期の水温は10.80~27.10、塩分は15.47~34.51であった。

*D. acuminata* : 4~7月および3月に出現し、最高出現数 (cells/ℓ) は内の海で70、小松島湾で80、橘湾で1,330、椿泊湾で250であった。全水域における出現時期の水温は10.80~27.10、塩分は17.40~34.51であった。

### 3. 二枚貝の毒化実態

*A. tamarense* の増加により、4月1日に内の海のアサリから規制値を上回る麻痺性貝毒が検出され出荷自主規制の措置が取られた。本年度の麻痺性貝毒の検出状況は、*A. tamarense* によるものが、内の海では、4月1日に5.8MU/g、4月12日に2.5MU/g 検出された。橘湾では4月11日に2.1MU/g、椿泊湾で4月12日に2.4MU/g 検出され、橘湾、椿泊湾ではいずれも規制値以下であった。*A. catenella* によるもの

は,6月13日に小松島湾で2.5MU/g検出されたのみであった。

一方,下痢性貝毒は全く検出されなかった。